

無痛分娩をご希望の方へ



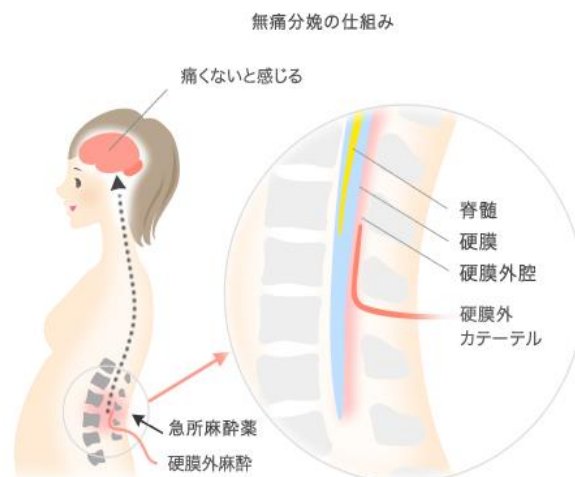
稲城市立病院
産婦人科病棟

～無痛分娩とは～

無痛分娩は麻酔を使用して分娩時の痛みを和らげるものです。その多くは、硬膜外麻酔によって痛みの緩和を行います。

～硬膜外麻酔とは～

腰から硬膜外腔に専用の針を使用して細いカテーテルを通し、そのカテーテルから麻酔薬を持続的に注入します。出産時の痛みは、子宮の収縮による痛みと、赤ちゃんが下がってくることによって膣や外陰部が押し広げられる痛みがあります。手術の時に使用する強い麻酔とは違い、その痛みを和らげることを目的とするため、弱い麻酔を必要に応じて使用していきます。意識がなくなることはありません。日本では無痛分娩を行っているほとんどの病院で、この方法が用いられています。



～無痛分娩に向いている方～

- 出産に恐怖心がある方
- 緊張しやすい方
- 痛みに弱いと感じる方
- 妊娠高血圧症候群と診断された方

～無痛分娩のメリット～

① 出産の痛みが和らぐ

出産に関する大部分の痛みを取り除くことができます。状況に応じて麻酔を増減できるため、お腹が張る感覚、息む感覚、お尻が押される感覚、赤ちゃんが出てくる感覚はあります。

※無痛分娩といいますが、痛みの感じ方が人それぞれであるように、麻酔を使用していても痛みを感じることはあります。痛みを軽くする程度に考えておいてください。また、硬膜外麻酔を挿入する際も局所麻酔を使用するため少し痛みが生じます。



②体力を温存できる、赤ちゃんに酸素が行きやすい

出産時には、痛みによる不安や恐怖によって身体が緊張し力が入ってしまう、パニックになってしまう、呼吸が早くなってしまふなど、お母さんの体力をたくさん消耗する可能性があります。麻酔を使用することによってリラックスしてお産に臨むことができるので、体力の消耗を最小限に抑えることができます。また、お母さんがリラックスすると胎盤の血流が良くなり、酸素が届きやすくなるので、赤ちゃんのストレスも減らすことができます。



～無痛分娩のデメリット～

①分娩遷延

- ・麻酔を使用するとそれまで順調に来ていた陣痛が弱くなり、間隔が開いてしまうなど、微弱陣痛の状態になることがあります。状況によっては陣痛促進剤の投与が必要になります。
- ・麻酔を使用している中で陣痛促進剤を増量していきませんが、麻酔の量を増やすと陣痛が弱くなるため陣痛促進剤を増やしたり、陣痛促進剤を増やすと痛みが出てくる可能性があるため麻酔を増やしたりと麻酔と陣痛促進剤の投与量の追いかけてこのような状態になります。
- ・微弱陣痛となったり、麻酔がよく効くことにより息む感覚が掴めず分娩停止となったりする可能性があります。吸引分娩や鉗子分娩が必要になる可能性があります。

※無痛分娩に限らずですが、なかなか分娩が進行しない分娩停止となったり、子宮の収縮のストレスや感染が起こったりすることにより、赤ちゃんの健康状態が悪化し、帝王切開が必要になることもあります。

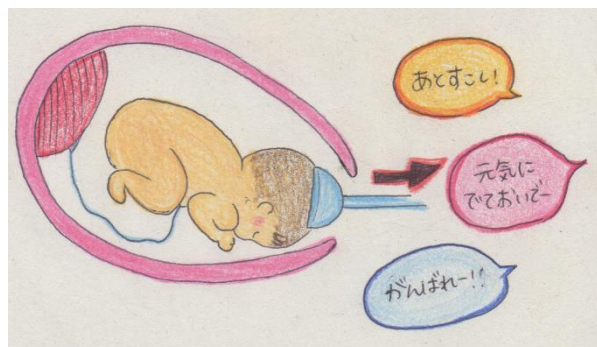
②費用

麻酔や専門の道具を使用したりすることにより、通常分娩より費用が高くなります。

通常分娩費用に別途 13万5千円（術前検査費 1万5千円＋無痛分娩費 7万円＋入院当日の入院費 5万円）がかかります。分娩誘導開始日から分娩までに日数を要した場合は、1日あたり入院費 5万円加算されます。

～無痛分娩のリスク（可能性があること）～

- ①微弱陣痛、器械分娩、帝王切開
上記の通りです。



- ②血圧低下

背中の中の神経には、血圧を調節する神経も含まれています。背中の中の神経が麻酔されることによって、血管の緊張が取れるため血圧が下がることがあります。一般的には、お母さんにも赤ちゃんにも問題とにならない程度ですが、まれに大きな血圧の変動が起こり、お母さんの気分が悪くなり、赤ちゃんも少し苦しくなってしまうことがあります。注意深く監視が必要になるので、硬膜外カテーテルを挿入するときや、無痛分娩中は血圧や心電図のモニターを装着させていただきます。

また、血圧低下予防および緊急時の対応に向けて、入院日に点滴をさせていただきます。

- ③発熱

発熱する原因は解明されていませんが、痛みを軽くすることにより汗をかきにくくなること、呼吸が安定することなどにより、体外に熱が放出されにくくなるのが原因の1つではないかと言われています。感染により発熱する場合もあるので、状況に応じて抗生剤を使用します。

- ④痛みが軽くない、片側効き、まだら効き

麻酔を使用しても、痛みが軽くならなかったり、片側だけに効いたり、一部分だけ痛みが残ることがあります。その場合は硬膜外カテーテルを少し引き抜いて調整したり、硬膜外カテーテルの入れ直しが必要になったりすることがあります。また、麻酔は比重が重いので身体の下になっているほうによく効くようになります。その場合は身体の向きを変えていただくようお願いすることがあります。

※床ずれ予防のためにも身体の向きを変えるようお願いすることがあります。

- ⑤足の感覚が鈍くなる、足の力が入りにくくなる

背中の中の神経の近くには、足の運動や感覚をつかさどる神経が含まれています。麻酔によって痛みを取ると、足の感覚が鈍くなったり、足の力が入りにくくなったりすることがあります。これは個人差があります。

⑥痒み

麻酔に組み合わせて使う医療用麻薬の副作用で、痒みが生じることがあります。ほとんどの場合、我慢できる程度の痒みです。

⑦尿をしたい感じが弱い、尿が出しにくい

背中の神経には、尿をしたい感覚を伝えたり、尿を出すための神経も含まれており、鎮痛の効果が現れるとともに、膀胱に尿が溜まってもそれを感じなくなったり、尿を出そうと思っても上手く出せなくなったりすることがあります。尿が溜まるとお産の進みが悪くなるので、無痛分娩中は細い管を使用して、定期的に尿を出します。

～．

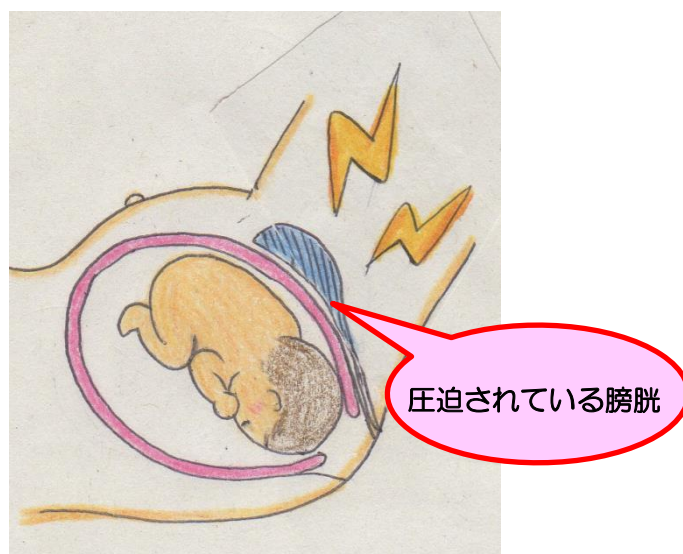
以下は稀に起こることです。

○頭痛

麻酔の針で硬膜が傷つくことによるものです。傷がついたところから髄液が硬膜外腔に漏れるため、髄液圧が下がり、血管拡張が生じる、または脳が身体の内側に引っ張られることが原因とされています。多くは1～2週間で自然に良くなります。

○排尿障害

出産後に尿が出にくくなったり、まったく出なくなったりすることがあります。分娩中に赤ちゃんの頭がお母さんの排尿に関する神経を長時間圧迫したことにより起こります。無痛分娩で分娩の進行が遅くなり、神経が圧迫される時間が長くなると排尿障害の発生率が上がります。赤ちゃんが生まれるまで長時間かかりそうだと判断した場合は、医師や助産師が相談して分娩を早める方法(吸引分娩、鉗子分娩)を提案させていただくことがあります。排尿障害の際には、定期的に細い管を使用して尿を出したりします。ほとんどの方が徐々に排尿の感覚が戻ってきます。



～当院の無痛分娩～

原則、平日 9:00～17:00 の実施となります。分娩の進行状況によってはその限りではありませんが、夜間に対応できないこともあります。

また、入院前に陣痛が始まり入院した場合には麻酔を使用しない出産もしくは和痛分娩を提案させていただくことがあります。

～無痛分娩のスケジュール～

入院日、無痛分娩当日の予定表をパンフレットの最後に添付しています。当日の詳しい時間は、入院時にお伝えします。入院日にも使用しますので、このパンフレットをご持参ください。

★無痛分娩中は痛みの程度を判断するために下記の指標を使用します★

◎痛みのスケールの評価

NRS(Numeric Rating Scale)で判定します。

痛みを「0：痛みなし」から「10：自分が想像する最悪の痛み」の11段階に分け、ご自分が当てはまりそうな数字をお伝えください。

麻酔を使用しないお産の場合、ほとんどの方が8～10を選択しますが、無痛分娩の方は0～3を選択しています。痛みが最小限になるように目指しますが、0を目指すと必要以上の薬剤使用をすることになってしまうので、あくまでも痛みを軽減する程度にご理解をお願いします。

～無痛分娩中にお願いしたいこと～

おおよそ2～3時間ごとに細いカテーテルを使用して尿を取らせていただきます。その際に内診してお産の進み具合を確認しますが、息みたい感じがある時、破水した感じがする時(パンと音がしたなど)、お尻が押される感じがする時は、その時点でお知らせください。

お産の進行スピードにもよりますが、多くの方は会陰から赤ちゃんの頭が見えてきたときにお産の体勢に変えさせていただきます。進行スピードが速い方は、赤ちゃんの頭が見えてくる前に体勢を変えさせていただくこともあります。

～無痛分娩中の飲食について～

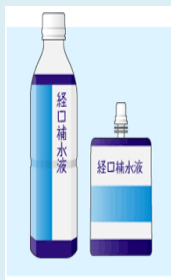
○食事

麻酔使用中は、誤嚥による肺炎防止のため、基本的には食事は禁止とさせていただきます。

出産後、麻酔を停止してから 1 時間後より食事が可能になりますが、出産時間によっては病院食を提供できないこともありますので、食べ物を持参して冷蔵庫で保管などをお願いします。

○飲み物：水・経口補水液・お茶・スポーツドリンク

飲んで良い物



※注意※

- ❖ 体重が BMI30 (Kg)
- ❖ 血小板が 10 万以下の場合には
無痛分娩ができません。
ご了承ください。

